

保育環境の取り組み～やってみよう～

1 はじめに

和田幼稚園は、昭和 59 年に和田幼児園として福岡県篠栗町和田に開設しました。和田地区には保育施設はなく、地域のニーズにも応えた形で出発しました。昭和 60 年代は専業主婦が多く、「乳児は家庭で、年中からは幼稚園に」が一般的でした。本園においても、定員を上回る数の子どもたちが園に入園してきました。

本園の理念は「あかるく、たくましく、かんがえる」創造性豊かな人を育てる」を目標に子どもたちを育ててきました。平成 17 年に和田幼稚園に変わり、満 3 歳～5 歳児 120 名と共に生活をしました。平成 27 年には認定こども園に移行し、1 歳～5 歳の保育を行ってきました。

自然災害、コロナウィルス、情報化、多様性等、社会の急速な変化（VUCA 時代）の中で、今保育・教育が果たす役割が大きくなってきました。子どもたちが今後 VUCA 時代を生きていく、生き抜いていくためには、何が大切なのかを真剣に考えていかななくてはならないと感じました。

平成 29 年には保育所指針、幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領の改正とともに、教育・保育に携わる施設が保育について共通認識をもち、目標をともにするようになりました。

和田幼稚園においても、教育・保育要領の改正が、「保育とは？」「教育とは？」「遊びとは？」今一度原点に戻って考える機会になりました。



2 福岡県人権同和協議会の研修での勝山結夢先生との出会い

福岡県の研修「自尊と自律を育てる保育環境」で、乳幼児時期の保育の大切にする、自尊と自律を育てる、保育環境の大切さ、自分で選んで自分で決める環境の話聴き、感銘を受けました。「こんな環境と子どもへの関わり方を学びたい」、そして「園の保育環境を変えていきたい」と思いました。

「子どもたちの発想や声を生かすことができれば、もっと保育が楽しくなる」。まずは、保育環境の

見直しからはじめました。3歳～5歳児の保育環境、保育室の広さを見直し、1歳～2歳児棟の空室を利用し、3歳児の保育室を移動しました。4歳・5歳棟では、あそびと生活を区切り、あそびが継続できるように広さを確保しました。保育室の空間を確保したけれど、保育者の保育への理解は浸透しませんでした。次に取り組んだのは、ICTの環境整備。一人一台のパソコンを支給し、園の情報や保育記録の共有化を進めていきました。以前の保育記録は週日案（今日の活動、子どもの記録1日3人）のみ。これでは保育の質を高めることができないと思い、年間指導計画、月間指導計画、週日案を作成するように、取り組みました。保育記録の内容も、子どもの姿、環境構成、保育者の援助・配慮、一日の振り返り等を記入するように、トップダウンで進めていきました。保育者の中には、「環境構成って何?」「どう書くの?」という保育者もいて、私自身も戸惑いました。そこで、年間指導計画は私が作成し、それに修正・訂正を加えていくようにしました。保育者は教育・保育教育要領を読み、必要な箇所を記録していく。一週間の記録のあとには目を通して、最後にコメントをしていく形をとりました。それが保育記録の改革1年目でした。2年目に入り、記録の書き方等については主任、副主任が話をし、項目を決め、進めてきました。「記録に慣れていない保育者が記録を書くのに時間がかかる」ほとんどの保育者が記録に対して、困難さを感じていました。

- 3 同時に、福岡県人権同和協議会から人権のモデル園としてお誘いを受けて、2021年度から開始しました。「保育者が管理する保育からの脱却」そして、「自尊と自律を育てる保育へ」それを構造化し、浸透させていく。勝山結夢先生を研修にお迎えしたことにより、4月に環境についての意識は高まっていきました。保育室も一人一人の発達、興味や関心を捉えて、コーナーを設置して、環境を整えました。環境は整ってきたが、今度はそれをどう構成し、「環境を通して保育するってどういうこと?」本質の問いへの悩みが大きくなっていきました。
- 4 4・5歳児の保育室では、「保育室のあそびの環境が広がるようにしたい」保育者からの提案で、園児のロッカーを廊下に設置し、4月から保育室の環境を変えていきました。それと、ランチタイムの時間を決め、「自分で選んで、自分で決める」、空腹時の状況やあそびの状況を確認する。「皆全員で、「えんちょうせんせい、いただきます。せんせい、いただきます。おとうさん、おかあさん、いただきます。」をやめ、「自分で席につき、自分で「いただきます。」をする」に変えていきました。年少児は、自分で席につき、自分で「いただきます」をする」ことに保育者が困難さを感じていたため、徐々に進めることにしました。





5 3歳児の保育環境（21年度2回目の研修後）

NPO 国際臨床保育研究所勝山結夢先生の21年度2回目の研修を6月に実施しました。研修後、保育室を見直し、広々とした保育室をコーナーに分け、それぞれの学びの環境を構成していく。「子どもたちが自分で選び、自分で決める」環境。ブロックしかなかった環境、それも子どもが選ぶのではなく、保育者が用意する環境が変わっていきました。子どもたちは自分で選んだ環境で遊び、子ども同士で言葉を伝え合いながら、あそびながら学んでいました。子どもたちは落ち着いた環境、そして「自分で選び、自分で決める」、一人一人の興味・関心や発達に合わせた環境があることで、遊びながら人（仲間、保育者）、空間、時間の保障をされ、他者の力を借りながら、自分で、自分たちで学びを深めていける。そう感じました。



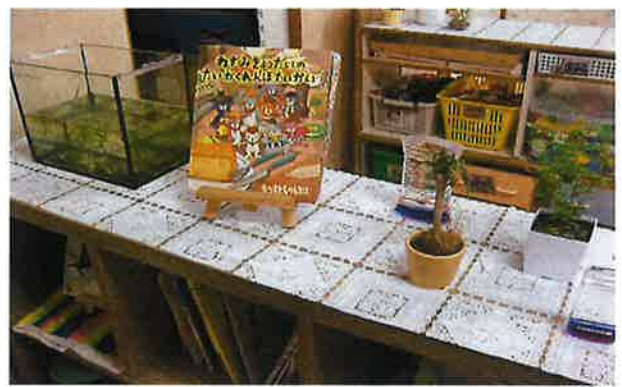
（研修前①）



（研修前①）



（研修後②）



（研修後②）

6 1・2歳児の保育室

4月から環境の見直しを行ってきたが、1・2歳児の保育室の環境の変化はみられませんでした。一斉に子どもたちを動かし、言葉による保育と待たせる保育がまだまだ保育者のイメージとしてあるように感じていました。7月に入り、白木棚を各保育室に購入し、玩具の量を増やしていきました。白木棚には玩具の写真を掲示し、「どこに何があるのか」を子どもたちに視覚的にわかりやすくし、子どもたちが自分で玩具を選べるようにしていきました。



(研修前①)



(研修前①)



(研修後②)



(研修後②)

7. 心悅保育園視察 (R4.12) (園長)

鹿児島県認定こども園心悅保育園を視察していきました。「一人一人を大切に」の保育理念のもと、乳児担当制、プロジェクト保育、保育室の環境が印象的でした。「一人一人を大切に」の保育理念が、保育や環境に豊かに表現されていました。遊びや生活を通して学ぶ、環境を通して学ぶ。「一人一人を大切にする」保育、子どもたちを丁寧に保育していることが伝わりました。

8. 年少預かり保育室、1・2歳児保育室

3月に入り、年少預かり保育室の環境の見直しを行いました。玩具の量を増やし、子どもたちが見て分かるように玩具を並べ、「自分で選んで自分で決める」環境を整えました。その後も預かり保育担当の保育者が「安心感・居心地感を大切に」環境を構成していています。1・2歳児についても、収納棚の扉を取り、「籠れたり、一人になれたり、ごろごろしたり」子どもたちが安心できる空間を

つくっていきました。子どもたちの動線を考えながら、整理棚の配置やコーナー保育（ままごと、構成あそび、絵本等）の環境を整え、少しずつ環境の見直しを行っていきました。食事、排泄についても、一斉にではなく、個々の状況に合わせ、保育をつくっていきました。



(2歳児：遊び込める環境)



(1歳児：お世話遊び、安心できる環境)



(2歳児：収納棚をゆっくりできる空間に)



(くつろげる空間と自分で選べる環境)

9. 令和3年度の振り返りと課題

令和3年度がはじまり、園長、副園長、主任、クラス担任でNPO国際臨床保育研究所勝山結夢先生の研修を受けたことが、保育環境を見直すきっかけになりました。研修を受け、保育者一人一人が「保育室の環境を見直したい」というエネルギーにあふれていました。その後、家具や整理棚をクラス担任と一緒に見てまわり、保育室の環境の見直し「やってみよう」がはじまりました。4・5歳児のクラス担任が中心となり、保育室を変えていったことがきっかけで、3歳児、2歳児、1歳児の保育者へ「変えてみたい」という思いが次々に伝導していったように感じています。

課題としては、保育環境において保育者がねがい・ねらいをもち、環境を構成しているが、次に環境を再構成することがみられなかったように感じている。「子どもたちの遊びを観察し、今子どもたちが何を感じ、何に面白さや興味・関心をもっているのか、次にどんな遊びになっていくのか」の意識を保育者がもち、共遊しなければ、子どもの気持ちを理解できないし、環境の再構成はできない。保育環境や玩具の量が増え、子どもたちの遊びが充実してきたからこそ、次のステップに令和4年度は進んでいきたいと思えます。

11. 令和4年度のはじまり

「自律と自尊を育む環境」「一人一人の育ちを見つめ、自ら育とうとする子どもたちを支える環境」「気づき、考えて、表現できる環境」「『やってみたい、してみたい』と子どもたちが感じる環境」。その基盤となるのは、安心感と居心地感。子どもたちが安心して遊びや生活して過ごせるように、まずは職員一人一人が「丁寧な保育」を心掛けました。4月の研修では、「丁寧な保育とは？」職員と考える機会をもちました。保育室についても、NPO 国際臨床保育研究所の勝山結夢先生の助言のもと、令和4年度は保育室を更地にし、子どもたちの遊びを主に、玩具や棚を整えていきました。



(保育者にとっても居心地感を)



(年少からの自分のシンボルマークを)



(誕生日の友達には特別なバッチ)



(ドイツゲームで)





生活と遊びを通して、子どもの育ちを支える

生活と遊びを振り子のように、行ったり来たりしながら、子どもたちは心と体と頭を自分で育てていく

4月に保育環境の研修を実施しました。乳児保育、幼児保育それぞれの課題に向けて走り出した。乳児保育では、「一人一人を大切にする保育を目指して」①居心地の良さ②いつも変わらない③一人一人がしっかり遊んでいる、まずは3つの視点を再確認することができました。人的環境が創り出す安心感や居心地の良さが、次への子どもたちの興味・関心を広げ、様々な環境へ自ら働き掛けていく、主体的で対話的な深い学び(アクティブラーニング)へと進んでいきます。幼児保育では、「サークルタイムを深める」をテーマに研修を行った。「言葉の大切さ」「自分なりに言葉で表現する大切さ」「言語処理能力には、個々に違いがある」「いかに子どもたちから会話を促すことができるか」(保育者が一方的に話すことなく)応答的に「聴く」ことが大切であることを学んだ。普段自分が使っている言葉たちを無意識から意識のなかに、専門職のスキルが発揮される。



